

## ■はじめに

この試みは、本学大学院修了の上村剛史氏の発案によるものです。上村氏は第46次南極地域観測隊越冬研究観測（地学系）に参加しており、この機会を捉えて、本学附属小学校の児童、附属中学校の生徒、本学の学生と南極基地の方達との交流を図ると共に、南極の自然や上村氏の研究内容について理解を深めることを目的に行われました。交流することにより、児童や学生達は、理科の学習内容を深めることができ、環境問題の実態を知ることができるとが期待されました。また、今話題になっているキャリア教育の一環としても考えることができると思います。

## ■実施

実施要領は、次のとおりでした。

【日時】2005年6月18日（土）午後3時30分～5時30分（日本時間／南極時間では午前9時30分～11時30分）

【場所】教育実践総合センター多目的ホール

【参加者】附属小学生、附属中学生、本学理科関係学部生・院生あわせて約60名

## ■附属小学校の部

附属小学校は、保護者の方も参加されていました。



南極基地からの質問に○か×で答える子どもたち



質疑の内容は、「南極の気候、温度、時刻、外の明るさ」「太陽星の動き」「その他の質問」「笛の演奏」でした。冒頭に子どもが南極での生活を想像し、彼が考えることのできる限りの厚着をして登場しました。

その後、南極基地からの質問に○か×で答える形式で進められました。子どもたちは、最高気温がマイナス10℃であることに驚いていました。また、「地球温

## 教室の窓

# TV会議システム利用による南極との交信

理科教育講座・教授  
森本 弘一

暖化で南極の水が融けるのではないか」といった質問では、「確かな証拠はない」という回答が返ってきて、日常で言われていることと科学者が言うことは違うことにも驚いていました。また、太陽が上へ登らず、ほぼ水平に動いて沈むビデオを見たときも大きな歓声が上がりました。



TV会議の様子（上）、音楽部による演奏（下）



## ■附属中学校の部と大学生の部

中学校でも同様に「地球温暖化」の質問がありました。次に「国際共同研究の様子」を話して頂き、英語の学習の大切さを子ども達は感じたようです。それから、附属中学校の国際共同研究の発表を行いました。これは、プログラムを搭載して自分で動くローバーを日本とアメリカで同時に開発しているものです。その後、クイズを行った後、音楽部が演奏を行いました。南極基地の方達には、楽しんでもらえたと思います。

大学生は、有志の参加でした。質問は、「オゾンホールの実態」「酸性雨・ダイオキシンの調査」「氷床による過去の気候変動の調査」「ウェゲナーの大陸移動説の証拠」「南極で見つかる隕石」「南極の地下水」でしたが、残り時間が少なく、十分な質疑ができなかったのが残念でした。しかし、彼らはこれを機会に地学に興味を持ち、進んで学習を行うようになりました。これは大きな成果です。

このたびの交信は、上村氏の発案によるものです。参加された方達は、南極を少しでも身近に感じる事ができるようになったのではないのでしょうか。このほかにも、南極基地は多くの学校と交信を行っているようです。このような活動を通して、科学と社会が少しでも近づけばと願っています。